

家めぐり



機械化農業で良質飼料の生産

北海道江別市 萩原一郎さんの経営

左右に青々とした水田を眺めながら、車北端にある雪印乳業江別工場に着き、酪農課の御案内を得て次の訪問地に向かう。石狩川に一段ときわ立った江別大橋を渡ると、昨年一昨年と猛威を極めた水害地帯に入る。今はその傷跡もすっかり癒えて、水田は整備され、畑地もえんばく（前進）は今や出穂の真盛り、青黒く肥料の効いた条が長々と続く、車から見られる作物は馬鈴薯、麦類、それに牧草が主であった。一本道を進むと、両側に行儀よく間隔を置いて構えの大きい農家の並んでいる。いずれも近くの野幌特産赤レンガを巧みに取り入れて、住宅、牛舎、倉庫が緑の畑と対照的に美しく映えている。この辺一帯は古く屯田兵の時代に入植されたところで篠津泥炭地に鍼を下して既に八十余年になるわけである。お伺いした模範酪農家は、この部落でも特に優秀な荻原一郎さんのお宅であった。息子さんは六年前にアメリカのミネソタで一年間ミッチル体験を積まれたペリパリである。お父さんと息子の健さんよりもごも経営につきお話しを承る。



健さん（左）と荻原さん夫婦

質の改良向上を計り、優秀な純系を導入して乳量の増大が試みられた。乳牛経済検定、酪青研、経営簿記、飼料計算と緻密な訓練を重ねられ、現在は雪印種苗の種子による優良品種の粗飼料と、これまた雪印の配合飼料オントリーで全く安定した経営に入っている。作付の概要を述べると、畑一七公頃、水田二・二公頃で畑地はラデノクロバーレ、赤クロバーレ、チモシー、オーチチャードの乾草用混播草地四・五公頃、牧草混播のえんばん二・八公頃、同じく混播の亜麻一・四公頃、メントヨーン(エロー・デントおよび複交七号)の地三・五公頃、住宅地農道(残)という構成で搾乳牛一二頭、育成牛一四頭を飼育しておられる。ここで、特に気付くことは販売作物を非常に少なくし主畜経営に転換してしまっていること、経営を単純化し労力の配分がうまくいくことで、更に本年度

からは道より貸与を受けたWD五十型トランクター一セットが入り一二戸共同（うち主畜経営は四戸）で仲良く作業しているので、機械化農業とはこんなに良いものかと今更の様に感謝しているとのことである。これも健さんがアメリカで十分機械作業に習熟し機械の手入取扱いがうまくいっていることが主因をなすものであろう。牧草の収取は六七七ゾで必ずしも多いとは言えなのが、収量よりも質に重点をおいている。乳牛が好食する自給飼料でなければ意味がないからである。またラデノクローバー単作の放牧地は乳量は増えれるがガスが恐ろしい。経験もない頃であったが二頭殺してしまった。それでチモシー、ペレニアルライ麦を多くして安全度を高めている。飼料作物は品種特性を知らねばならない。例えば、家畜ビートにしてもハーフエローは軟らかくいかにもうまそうだし、貯蔵性を考えると春先用にM.G.M.、ニュガーマンゴールドが必要となる。給与の面でも色々のえさがあり

必要なわけで、えんぱく、牧草のサンマー
サイレージも近年良質の糖蜜飼料が手に入
る様になつたので立派なものが作れる様に
なつた。それでサイロも更に一本新設して
三基とし、年間空にならぬように順次ぐりに
使つてゐる。乳配の与え方も常に乳量、牛
の健康とこまみ合せ飼料価を考えてやつて
いる。(飼料計算の出来る者がその基礎に
立つて更に自分の経験を加味して牛の個体
差を入れた給与をしてゐる。……これが本
当の牛飼いの姿であると痛感した。)
最後に良く手入れされた圃場を拝見し、
何か将来に對する御希望を承つたが、種苗
の販賣によつて、おまけに

現地ルポ

優秀酪農

自給飼料増産が酪農成否の鍵

北海道江別市 鈴木藏一さんの経営



鈴木さん（左から二番目）とその家族

北海道のやや中央部、札幌より汽車で四分の所に江別市がある。石狩平野に囲まれ、遠くに山系がかすかに望む全くの平野である。この石狩平野の中を石狩川が流れ、水田地帯の貴重な水源ともなっている。鈴木さんは、江別市街より約三キロ、附近一帯は泥炭土質で、決して条件の良い所ではない。鈴木さんは、この泥炭土質という瘠地で、當時、雑穀類を作付していたが、もともと地力の乏しい所、眼に見えて減収をきたした。金肥のみでは到底增收が望めなく、有機質の堆肥の施用が必要であると痛感し、昭和二十五年、乳牛一頭を導入したのが、そもそもの酪農の始りである。それ以来、努力の甲斐もあって、地力が目立つて向上し、乳牛も順調に繁殖、それに伴って、自給飼料の増産も必要となつたので、漸次、換金作物畑を牧草畑に切換え、現在では、搾乳牛一頭、育成牛六頭、耕地約九町の内、自家用の水田三〇畠と蔬菜園若干の外は、全部飼料畑に切換え、酪農一本に専心している。

家族は、父、母、奥さんと三人の子供の計七人であるが、農業従事者は鈴木さんと奥さんの二人で、蔬菜園、にわとり一〇〇羽は父母が担当している外は、一切を切り廻している。このため、労働の配分にも工夫が見られ、デントコーンの切込時に臨時

五分の所に江別市がある。石狩平野に囲まれ、遠くに山系がかすかに望む全くの平野である。この石狩平野の中を石狩川が流れ、水田地帯の貴重な水源ともなっている。鈴木さんは、江別市街より約三キロ、附近一帯は泥炭土質で、決して条件の良い所ではない。鈴木さんは、この泥炭土質という瘠地で、當時、雑穀類を作付していたが、もともと地力の乏しい所、眼に見えて減収をきたした。金肥のみでは到底增收が望めなく、有機質の堆肥の施用が必要であると痛感し、昭和二十五年、乳牛一頭を導入したのが、そもそもの酪農の始りである。それ以来、努力の甲斐もあって、地力が目立つて向上し、乳牛も順調に繁殖、それに伴って、自給飼料の増産も必要となつたので、漸次、換金作物畑を牧草畑に切換え、現在では、搾乳牛一頭、育成牛六頭、耕地約九町の内、自家用の水田三〇畠と蔬菜園若干の外は、全部飼料畑に切換え、酪農一本に専心している。

ここで、作付の概要を述べてみよう。蔬菜園、水田を除いた耕地八・五町を九区分し、それぞれ輪換方式を取り入れ、地力増進維持を計っている。

内訳を見ると、第一表の通りで、デントコーン、青刈えんばくは冬期間のサイレージ、ビートは一部委託採種を兼ねていて、が、冬期用と、寒冷地に欠かせない冬期飼料の確保に万全を期している。

また、牧草四区について見ると、採草地二区には赤クロバー、ラデノクロバー、ルーサン、アルサイククロバー、オーチヤードグラス、チモシー、イタリアンライグラス、ペレニアルライグラスの多種類混播により、安定性を持たせ、良質の牧草を生産している。このうち一区をサンマーナイレージに、一区を乾草に供している。放牧地は三年目に更新、生産力の向上に努めている。

あの瘠薄な土地が、これほど肥沃になつたのも、堆肥のためで、鈴木さんは異常なまでも、この堆肥の大切にしている。このため、牧草地更新時（秋耕し）では、少なくとも堆肥を一〇kg当たり四、〇〇kgは入れ、石灰も秋耕しと播種直前に〇〇kgを施用している。堆肥、石灰の投入ほど、牧草の增收に効果があるか、鈴木さんは身をもって体験した結果な

は、傭人を入れるほかなく、作付の単純化により、労働面での過重は全く見られない。

鈴木さんは現在江別酪研の委員長を務めるなど、酪農経営、飼料作物栽培技術に真剣に取り組み、新しい技術を着々と投入している。

ここでは、作付の概要を述べてみよう。

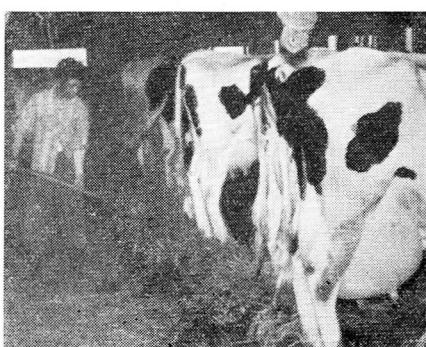
内訳を見ると、第一表の通りで、デントコーン、青刈えんばくは冬期間のサイレージ、ビートは一部委託採種を兼ねていて、が、冬期用と、寒冷地に欠かせない冬期飼料の確保に万全を期している。

また、牧草四区について見ると、採草地二区には赤クロバー、ラデノクロバー、ルーサン、アルサイククロバー、オーチヤードグラス、チモシー、イタリアンライグラス、ペレニアルライグラスの多種類混播により、安定性を持たせ、良質の牧草を生産している。このうち一区をサンマーナイレージに、一区を乾草に供している。放牧地は三年目に更新、生産力の向上に努めている。

あれからも、良質粗飼料の増産には力を入れるつもりです。

水桶、雑穀類は、とくに北海道のよう

寒冷地では、天候に大きく左右されやすいものですが、この点、酪農はある程度余裕がありますね。一昨年、昨年の水害、冷害で酪農の有難味というものを、つくづく考えさせられました。私はこれからも、良い飼料の増産に努力しますよ。（近藤記）



この堆肥のおかげで牧草ができるようになりました、と語る鈴木さん